

漢法苞徳塾資料	No. 053
区分	論説(内経学会)
タイトル	「気の所在を刺す」に関して (74難をめぐって)
著者	八木素萌
作成日	1990.02.11

1. 前言

◎「どのように孔穴を取穴し配分すべきであろうか？」について、一定の確固とした見識を持っているかどうかは鍼灸の臨床にとって重要な問題である。この問題に関する実態を概観すると、

- a. 圧痛点療法に分類されるもの、
- b. 穴の治療効果を薬効的に把握して目的に応じて適宜に配合処方する方法（薬の配合処方と同様な発想で配穴する方法＝最近の中国からの“配穴学”配穴処方学”などの傾向にみられるもの）、
- c. 臓腑や経絡など人の生理的なものや病理的機作やの一定の認識（組織的な）に基づいて選経選穴し配穴するもの、

これらの三種類に大別できると思う。

『経絡治療』と呼ばれている方式は、c. 分類に属させられると思う。

柳谷素霊の『臓腑虚実補瀉表』をみると、「補法」の場合では「自経の母穴と母経の自穴を補し・自経の剋穴と剋経の自穴を瀉」しており、「瀉法」の場合には「自経の剋穴と剋経の自穴を補し・自経の子穴と子経の自穴を瀉」している。これは『難経』六十九難の《子母補瀉》法と『七十五難』の《金木水火土当更平法》（相剋関係の利用法）とを統合させたものである事が分かるのである。

◎『難経』に記述されている配穴の原理は『六十九難』と『七十五難』のみではない。『気の所在する所を刺す』と言う原理が記述されている。これが『七十四難』を軸に展開されている原理である。

『難経』は正確な診察診断を強く要求している。従って『八十一難』に言うように「虚々実々・損不足益有余」の誤りを犯さない為には、補瀉の決定に際して脈による判断に基づくのではなくて、病そのものの虚実に従うべきである事を主張している。

『七十二難』では、経脈での栄衛の疎通の状況を良く診察して、その逆順に応じて取穴すべきであり、それは陰と陽での病の「内外」や「表裏」を診て、その状況に応じた取穴によって、「気」を調えることが出来るのである。この様に言っている。

『七十六難』では、補や瀉などを行なうのは「栄衛」を「通行」せしめると言うことの為である、この様に述べている。

◎『難経』の総字数約 12000 字弱の内、脈を論じている部分の総字数は約 6000 字であるが、陰と陽の弁別と五臓の辨別が、脈診における主要な主題になっている。そして脈状診が中心的な脈診法である事が記述から明らかである。しかるに何故か「六部定位の脈差診」が『難経』の「脈法」と言う事になっている、これは『十八難』の上段の記述と中段の記述とを拡張解釈したかヒントを得たかで創作したものであろう。『難経』の記述そのものからは「六部定位の脈差診」なるものは見出せない。『難経』脈論を「六部定位の脈差診」として把握した結果、脈による五臓辨別・陰陽辨別・病因辨別の部分や病位の左右上下の辨別が、切り捨てられてしまったのは甚だしく遺憾なことと言わねばならない。

◎『難経』の脈状記述と『素問』平人氣象論第 18、『素問』玉機真藏論第 19、『素問』宣明五氣第 23 などに見える脈状表現は非常に似通っている。そうすると、単純に浮沈虚実で六部の脈差を診定するのは、『難経』の脈論と異なった脈診法であるのみでは無く、危険でさえあるものとなる事が分かる。

2. 七十四難の主題

◎『六十九難』と『七十五難』の記述を見ると、「虚実」の問題を記していることが分かる。「虚せるものは之れを補し実せるものは之れを瀉し、実せず虚せざれば経を以て之れを取れ」（69 難）、「東方実し西方虚せるは 南方を補し北方を瀉せ……」（75 難）となっている。「気の所在」「邪の所在」に対応する刺法としては記述されていない。外感病を論じている『五十八難』の上段の末尾部分には「…温病の脈の行は諸経に在りて何経の動たるかを知らざるなり 各々其の経の所在に随いて之れを取れ」と述べている。外感病であるから如何なる「邪」が何処に在るのが大いに問題であろう。従って「邪の所在」「気の所在」するところが把握されねばならないであろう。この意味で『七十難』と『七十四難』の記述は重要であると思われる。

◎治療に際して病が外感病か内傷病か雑病かの区分を診定める事は極めて重要である。『十四難』と『四十九難』と『六十九難』とによって他邪に犯されていない場合の「正経自病」としての内傷病の治則は示されており、外感病については『五十八難』の広義の「傷寒」の記述によって診定と基本的治則が記述されている。

臓腑の病は「原穴」に取穴せよと『六十六難』は記述しており、熱病が内にあれば八会穴から選穴するようにと『四十五難』は述べている。

「積聚論」は、発症の機序を説明して五臓分類を明らかにしているが、治療的な記述はない。しかし、例えば冬に肝が病むと肝は病を脾に伝え脾は更に腎に病を伝えようとするのであるが、冬は腎が旺気しているので病が伝えられるのを拒否する、故に、病は脾に滞留することになる為に「脾積」となると記述しているのである。従って肝が冬の「水」気に侵された事が示されている。正に「他邪」に当たったのであるから、外感病のこじれたものとして位置付けられる。『傷寒論』に言う雑病の概念とは違うが、ある程度の関連性も考えられる。

◎『七十難』には「春夏に浅く刺せというのは外気も人氣も上にあるからであり、秋冬に深く刺せというのは外気も人氣も下に在るからである、然し春夏には体の陰気を浮き上げさせてやり、秋冬には体の陽気を押し入れてやるようにも刺すべきで、これは陰陽の調和と言うことであるからだ」と述べている。この記述は『七十四難』と緊密な関係をなしている。また『七十四難』には「季節の移り変わりは人の生理にも法則的な影響を与えるので病も季節の五行性を反映した病証的な表現が姿を現わすのだ」とも述べている。

◎『六十八難』に記述されている五腧穴の主治症「井は心下満」「滎は身熱」「兪は体重節痛」「経は喘咳寒熱」「合は逆気而泄す」を主るとするのは、単に記述されている症候を主治するものと理解するのは正しくないと言わなければならないと思う。

これらの症候は「井＝木」「滎＝火」「兪＝土」「経＝金」「合＝土」と言う五行性の、つまり「木＝肝＝風」「火＝心＝熱」「土＝脾＝食・湿・労」「金＝肺＝寒（上空からの冷え、項背部から淫侵する邪となる）」「合＝腎＝冷え（低い所、大地からの冷涼さであり、下肢下腿下腹から淫侵する邪となる）」と言う関連性に基づく一連の症候群を代表するものとしての記述であり表現である。このように把握する事が正しい理解であろう。

と言う事は

「井」穴は「肝」「風」に由来する一連の症候の治療に用いられる事・

「滎」穴は「心」「熱」関連の諸症候に、

「兪」穴は「脾」「食・湿・労」に由来する諸症候に、

「経」穴は「肺」「寒」関連の諸症候に、

「合」穴は「腎」「冷涼」「氷冷」に由来する諸症候に、

治療穴としての作用を持っていることを述べているものである。

◎これは病因が何故判断できるのであるか？と言う事にも関係している。この問題は病因判定の理論的な根拠と方法を記述している幾つかの難を研究する事によって明らかとなる。

『十難』には、脈状と病の関係を臓と臓・腑と腑の関係の相互作用として把えてそれは「五邪の剛柔の相逢の関係」として表現して、一つの臓の脈が十通りに変化する事を述べている。

『四十九難』には、「五邪」とは「中風」「傷暑」「飲食勞倦」「傷寒」「中湿」であることを示した後、「心」の病変を例にして脈と主要な病候がどんな具合に現われるかを記述している。また「正経自病」についての記述も「憂愁思慮は則ち心を傷る」・「形寒飲冷」は「肺」を・「悲怒氣逆上而不下」は「肝」を・「飲食勞倦」は「脾」を・「久坐湿地強力入水」は「腎」を「傷」と述べている事と、

『十六難』に、五臓の病証が記述され、

『十五難』には、「春脈弦は肝・東方・木なり」「夏脈鉤は心・南方・火なり」「秋脈は毛・肺・西方・金なり」「冬脈石は腎・北方・水なり」とあり、

『三十三難』には、「肝・青は木を象どる」「肺・白は金を象どる」などとあり、

『五十六難』には、肝は春に旺気し、心は夏に旺気し、脾は長夏に旺気し、肺は秋に旺気し、腎は冬に旺気することを記述している。

『四十九難』の心が風に中った病証には「脇下満痛」と「弦」脈が心の病証である「身熱」と「浮大」脈とが現われると記述している。

これは病因の持っている五行性が身体の生理反応の五行性を媒介にして表現されるものであるという認識が、つまり、例えば火性の臓（心）が木性の病邪（風）に冒されると病証的には火性のものと木性のものとが並行して現われるという認識が示されているのである。

『五十難』の虚邪・実邪・賊邪・微邪・正邪の記述は、火性の臓は木・火・土・金・水の五行性の邪（つまり総ての邪に）に冒される事と、この臓と病邪との関係には十三難に記述されている様に、相剋的（この中にも微邪と賊邪がある）なものと相生的（実邪と虚邪とがある）と正邪（正経自病）の区別があって病の予後を規定するものであると理解しなければならない記述となっている。

- ◎『六十八難』の五腧穴の主治症の記述は、五臓の主治の様に見えるが、むしろ主として病因の五行性を主治する事を記述したものと解釈すべきものの様である。何故ならば、『十難』の記述の筆法は、例えば「脾の邪・心を干す」「肺の邪・心を干す」の様に表現しているが、『十五難』の「秋脈・西方・金なり」や『三十三難』の「肝・青は木を象どる」「肺・白は金を象どる」などに見られるものは、五行の臓腑配当である。『四十九難』の記述では「～何れを以て中風にこれを得たるを知るや～肝・心の邪と為る～其の病・身熱し脇下満痛す其の脈・浮大にして弦」「～何れを以て飲食労倦にこれを得たるを知るや～脾邪の入心を知る～其の病・身熱して体重く嗜臥（臥すことを嗜なみ）して四肢収まらず・其の脈は浮大にして緩」の様になっていて、『七十四難』の「～春に井を刺すものは邪肝に在り～」と言う場合の「肝」とは主に「風」を意味する事が分かる。従って、『六十八難』の「井は心下満を主る」などの五腧穴の主治症が主に病因の五行性の表現としての症状に対応するものとして解釈することが適切と言えよう。

- ◎五腧穴の陰経における五行配当が陽経の配当と異なっていて、陰経と陽経との相互関係が「剛柔」の間柄となっている。陽経の五腧穴の主治証は井・榮・兪・経・合の主治証に従うものである。